住まい活動助成

NPO法人 チュラキューブ

大阪府大阪市

公社空き住戸を拠点にした障害者による 「みんな食堂」で高齢者の孤食防止と 地域交流を図る活動





12月4日[水]のメニュー

ササミ磯部あげ 人参しりしり

旦たくさん味噌汁

価格:350円

10:00~開催!

ことになりました!

グッド デザイン 2019 より、ご支援を頂ける 選出されました 杉本町みんな食

ホームページ、お気に 入り登録を!スマホの カメラで読み取って下



日替わりのメニューを紹介するチラシ

団体設立経緯

公益財団法人 みずほ福祉助成財団

◆ CAMPENA 日本生命財団

私たちの団体は、高齢者や障が い者などの社会的弱者の支援を目 的とする事業の推進、並びに高齢 化社会、障がい者の生活の不自由 さなどの社会問題を解決する手助 けとなることを目的に、2012年に設 立いたしました。

人口減少時代のなかで発生する 地域課題、農業や伝統工芸などの 産業の担い手の問題、障がい者雇 用の問題などを解決するため、そ れぞれをつなぐ新しいプロジェクト を立案し、運営しています。

活動概要と活動対象範囲

18年8月に大阪府住宅供給公社 と当法人が提携して誕生した、地域 の孤食支援のための食堂が「杉 本町みんな食堂」です。大阪市住吉 区杉本町にある団地「OPH杉本町」 102号室にあります。この団地では 全71戸のうち、70歳以上の居住者 は全体の6割を占め、高齢者単身 世帯が多く、空き部屋も20部屋に 及びます。

みんな食堂では、団地内の空き 家対策と、孤立しがちな住民の交 流拠点としての機能を提供します。

当法人が運営する障がい者福祉作 業所と連携しており、1食350円のラ ンチメニューを、知的障がい・精神 障がいのある作業所の利用者が凋 に3回調理を担当し、さらに食堂内 での接客にも従事しています。

活動に至った理由や背景

団地の建て替えが竣工してから の10年間は、入居者間の横のつな がりが特にない状態でした。高齢 化率が高い中で単身者も多く、孤 食・個食での日常を過ごしている住 民の存在が見えてきました。







週3日オープンする「杉本町みんな食堂」(左上・左下の写 真)。ランチタイムには、大勢の地域住民でにぎわう

杉本町には市営住宅も多く、母 子家庭・父子家庭も目立ちます。そ こで、当法人、大阪市立大学、関 西大学の学生ボランティアをコアメ ンバーとして、地域におけるフィール ドワークや住民ヒアリングを実施。 「みんな食堂」を、地域の孤食に悩 む多世代の方々が集うサードプレイ スに育てています。

活動内容と成果

当法人を中心に動き出しはじめた 地域食堂ですが、特に助成をいた だくまでの半年間は、試行錯誤の 連続でした。

応援してくれる住民さんが現れ、 「10年ぶりにできたつながりの場を、 なんとか守っていこう」と背中を押し てくれました。団地内のその他の住 民にチラシを撒いてくれたり、単身 の男性居住者に直接声をかけてく れたり。それでも、なかなか新しい つながりは生まれませんでした。そ して、常連の中でも、「自分の思っ ていた場所ではない!」と離れてし まった70代女性、「応援するために 気持ちが入りすぎて疲れた! と来な くなった80代女性など。数名からの スタートになりました。

●講師を招きコミュニケーションス キルを自主学習

助成をいただきまず取り組んだの は、運営チームのスキルを高めるこ と。地域食堂に関わりたいと手を 挙げてくれていた、大阪府住宅供 給公社の森崎雅巳さん・豊嶋洋子 さん。関西大学人間健康学部で福 祉を学ぶ由浅悠さん・福川珠実さ ん・今道健人さんらを集め、2019 年4月には大阪コミュニティー協会 で地域活動の中間支援を担当して いる堀久仁子さんに依頼し、「コミュ ニティーデザインの基本を学ぶ」と 題した講義を実施しました。地域 の住民はどんな感情で暮らしている か、人と人とが出会うときの緊張を 解きほぐすか、他地域の事例につ いて学びました。

また、不動産業をしながらフリー ランスとして活動する近藤慶さんか らは、5月から6月にかけて計4回、 「地域ヒアリングを学ぶ」と題した講 義を提供いただきました。大阪市住 吉区という町はどんな歴史を持つ 街か、大阪市立大学と学生の下宿 地域、大和川が持つ部落地域の歴 史について、母子家庭・父子家庭 などの暮らしなどについて学び、実 際にその中でヒアリングをする難し さと可能性についても議論しました。

9月には、大阪・ミナミで生活困 窮者支援に取り組んでいる油谷聖 一郎さんから、「社会的養護の基本 を学ぶ講義」として、現場にはどん な層が来るか、それをどんな機関と 連携をして支援をしているか、関わ りの気持ちの持っていき方などにつ いて学びました。

これらの講義を受けたことによっ て、新しい住民の招き方や従来の お客様と新しいお客様とのコミュニ ケーションの違いについて、生活困 窮者への対応についての力が身に 付いたように感じています。

●住民対象のスマートフォン・健康 講座の開催

地域食堂に通ってくださる皆さん へのヒアリングでは、「スマホにつ いて学びたい」、「健康についての知 識を増やしたい、体操をしたい」と いう声が多く上がりました。これを 受けて地域住民を対象に8月と9月、 健康アプリをベースにしながらのス マホレクチャーとフィットネス担当者 のコラボ講義を開催をしました。

これは非常に好評で、高齢参加者 からは動画サービス「YouTube」を見





調理や配膳は、障がい者福祉作業所との連携で障がい者自らが担当する。働 く場を創出すると同時に、高齢者や子育て世代との相互理解を深める場所とし ての機能を果たす



柔道整体師の指導で、みんなで椅子ヨガ。食堂以外にも、 地域のニーズを拾い上げていく



たい、スマホ決済アプリ「PavPav」 を使いたいなど、積極的な質問が 出てきました。フィットネス面では、 万歩計アプリと連動をした簡単な 健康体操のレクチャーなどにつなが り、10名前後ながら盛り上がりを見 せました。

また住民から、日々の健康体操 をしたいけれど、膝が弱っているの で椅子に座ってのヨガを希望する 声、そして健康に関しての相談をし たいという希望が出てきました。そ こで、柔道整体師として活動をして いる大口淳子さんが、日々の健康 のケア方法についてお話をしたり、 簡単な椅子ヨガをしたりする場を設 けました。60代~80代までが集ま る寄り合いの場となり、次年度にも 開催をしてほしいという声が住民か ら届いています。6月~翌年3月まで、 月に1・2回ほど開催。週3日のラン チ食堂には来ないけれど、ヨガの 集まりには来られる方もいて、とて もいい流れができています。

●周辺地域の「こども食堂」へのヒ アリング

活動を続けていく中で、大阪市 住吉区社会福祉協議会とのつなが りが生まれ、住吉区のこども食堂 の連絡会に参加をしてもらうことに なりました。この関わりの中で、住 吉区の区民祭りに「こども食堂」と して参加をさせていただけたり、他 の食堂と関わりを持つことができた り、より地域に深く根差すキッカケ をいただけました。

そこで聞いたのが、隣町の平野 区の「こども食堂」がパワフルであ るということ。そこで9月以降には、 平野区にある常磐会学園大学の大 学生たちの学生サークルと、地域 コーディネーターの古谷晃一郎さん

とともに、区内すべての地域食堂を ヒアリングし、自身の食堂にも取り 入れることができる良さを学ぶこと になりました。住吉区は地域の福 祉施設が運営している食堂や自治 会が運営している場所が多いのに 対して、平野区は障がいのある子ど もを育てるママたちをはじめ、比較 的現役世代が多いイメージを強く受 けました。

杉本町みんな食堂には、地域に 生活基盤を置くスタッフがほぼいな い状態です。それが功を奏して、杉 本町に引っ越してきた方、地域で子 育てをはじめている方、移住をした けれど故郷を別に持つ方など、土 着じゃないからこそ生まれる縛りの ないつながりを、食堂の利用者は 気楽に感じているという、他の食堂 との違いがわかってきました。

そして何より、杉本町みんな食

堂の大きな特徴は、知的障がいの あるスタッフが調理・清掃・給仕 に携わっていること。常連の皆さん も、障がいスタッフが名前を覚えや すいように名札を手作りしてくれた り、ゆっくりと話す彼らを優しく待っ てくれたり、たまに休んでいると気 にかけてくださったり。障がいスタッ フが孤食の高齢者を支え、経験豊 かな高齢者が働く力を身につけた いと願う障がい者を支えるという、 ゆったりとした優しい関係性が成り 立っています。

●活動を振り返っての所感

この1年の活動の中で強く心に刻 んだことは、「去る者は追わないが、 関われる場は作り続ける」というこ とでした。

高齢者だって老いてくる中でデイ サービスに通って顔を出せなくなる こともあるし、病院に行く頻度が増 えることもある。子育てママだって、 子どもが大きくなって働きに出るこ とで食堂に来られなくなる人もい る。運営をしている大学生も、就職 をすることで離れてしまう人もいる。 それぞれの人生のステージによって お客様も変わっていくので、1つ1つ に心を痛めてはいられません。

だからこそ地域食堂としては、ど んな形であっても継続していくこと で、いつでも帰ってくることができ る、関われる場を作ることが大切。 ミニイベントなどで新しい関わりを 生み出す場を提供することも大切。 そうやって力を入れ過ぎず、それで も真摯に取り組むことで、きっと障 がいスタッフも、地域食堂の幅広い 世代の住民たちも、ゆっくりとじっ くりと地域の中に溶け込んでいける のではないかと考えています。

課題と解決方策

食堂の運営をしている中で生じ た課題としては、利用者の偏りが



イサービスや病院に行く人が多く、 バッティングしてしまう。子育て世代 については、未就学児を育てるママ に限られてしまいがちです。

試しに土曜日に営業してみても、 小学生以上の子育て世代は、パパ ママも子どももなかなかに忙しい。 地域食堂の顧客層を広げていくべ きかについては、非常に悩みつづ けています。

また、障がいスタッフについても 課題があります。障がい者福祉施 設に通っているスタッフに仕事とし て託すことで、経済的な持続可能 性を作っていこうと仕組みを作った のですが、就労系の施設に通う障 がい者の一番の目的は、企業へ就 職をすること。そうなると、スキル の高い障がい者は優先的に就職を してしまい、また新しい障がいスタッ フを食堂で一から育てていく難しさ があります。

今、検討を進めている打開策とし

障がいスタッフを、約2年ほどの期 間限定として出向して働いてもらう ことで、働く訓練をする場として地 域食堂を活用できるのではないか と考えています。

今後の予定

新型コロナウイルス感染症の影響 で、3月は慎重に運営を継続しまし た。小学校が休校していることから、 毎週火曜日に常磐会学園大学の大 学生たちと「こども食堂」として、こ れまで4回運営しました。毎回10人 くらいの小学生が集まり、月・水・ 金にはその小学生が保護者を連れ てくるという状況も生まれています。 有事だからこそ地域食堂は集いの 場・情報交換の場として求められて いることを再認識しました。

今後は、せっかくつながることが できた小学生たちの関わりも維持 できるように、子どもだけの食堂の 日を作っていこうと検討しています。

特定非営利活動法人 チュラキューブ

2012年6月法人設立/メンバー数:3人/代表者:中川悠(なかがわ・はるか) **≡**chura-cube.com

私たちは、障がい者の働く力・コミュニケーション力を育て、高齢者や子ども たちの孤食・孤立を防ぐため、ダイバーシティーの助け合いが生まれる地域食 堂を運営しています。